

避難所の子どもたちのために わたしたちができること



横浜国立大学 AEゼミ
**アートツール
キャラバン**



わたしたちはこれまで、子どもたちに「自分の感じていることを大切にしてほしい」と願い、いろいろな場所で造形ワークショップを実践・展開してきました。

このたび、東日本大震災で被災された多くの方々が、大学の近くに避難されていることを知り、美術教育にかかわるわたしたちができるることは何かを考えました。

震災から1か月が経ちますが、避難所の子どもたちは地元を離れた土地の学校に編入学し、不安を抱えながらも徐々に新しい友だちと仲よくなりつつあるのではなかろうか？

わたしたちは、そんな彼らに創造的で協働的な〈あそび場〉を提供したいと考えています。避難所の子どもたちと編入学先の子どもたち、そしてそれを支える大人たちとで心地よい時間を共有できればと願っています。

横浜国立大学 AEゼミナール 〈アートツール・キャラバン〉のご紹介

2011.4.15

(世話人) 横浜国立大学 教育人間科学部 学校教育課程 美術教育講座
大泉 義一

1 概要と経緯

〈アートツール・キャラバン〉とは？

- 〈アートツール・キャラバン〉は、子どもの感覚（五感…視覚・触覚・聴覚・嗅覚・味覚）を刺激して、能動的で実験的な表現行為を促す〈アートツール〉が設置された〈遊び場〉です。
- そこではまず、子どもたちが〈アートツール〉で遊ぶことで自らの感覚を発揮し、創造心を奮い立たせることができるでしょう。
- そうして能動的で自由な表現活動に取り組むことが促され、自分の実感から、自分たちの生活や他者との関係を新鮮にとらえ直すようになります。
- このような〈アートツール・キャラバン〉は、子どもたちが居る様々な場所（公園、公共施設、美術館、学校など）を訪問しています。

(1) プロジェクト概要

○本プロジェクトは、ゼミメンバーが、学校や地域施設、地域イベントや美術館など、子どもの居る場所を巡回して造形ワークショップを実践するための教具装置群（＝〈アートツール〉（図1））を創案・製作し、それらによって環境構成された実践プログラム（＝〈アートツール・キャラバン〉（図2））を開発・実践することを目的としています。このプログラムにおいて子どもたちは、〈アートツール〉で遊ぶことを通して、自らの感覚を発揮し創造心を奮い立たせることができ、自分たちの生活や他者との関係性を新鮮にとらえ直すようになると考えています。

○さらにゼミメンバーと〈アートツール・キャラバン〉の実践を展開し、それに参加する子どもたちの活動様相を分析・考察することにより、ワークショップ形式によるデザイン教育実践の教育的意義を子どもの視点から検討するとともに、子どもの造形・デザイン活動の個別具体的な在り様に対するゼミメンバーの理解を促し、教育関係者、子どもとかかわる大人としての資質の向上を図ることを目指します。

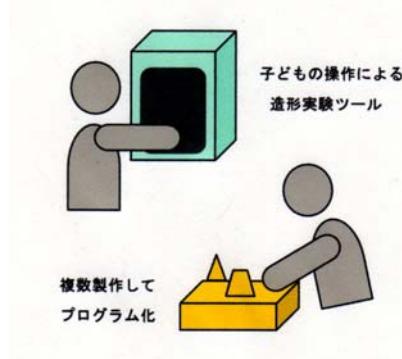


図1 〈アートツール〉のイメージ

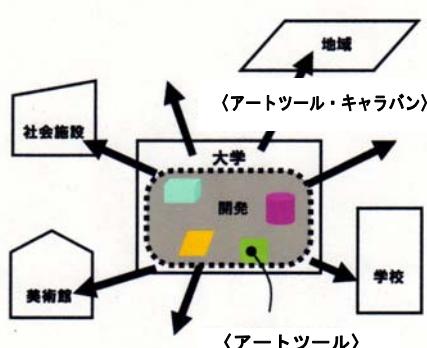


図2 〈アートツール・キャラバン〉のイメージ

(2) 実践メンバーである〈横浜国立大学・A Eゼミ〉について

- 〈A Eゼミ〉とは〈Art Education seminar〉の略称です。
- 〈A Eゼミ〉は、「アート+教育+子ども」に関心のある横浜国立大学のメンバー有志で構成されています。現在、40名あまりが所属しており、メンバーには、将来教師になりたい人、現在教師をしている人、関心のある社会人、そしてデザイン・教育の研究者がいます。単位履修を伴わない完全有志のメンバーであり、その立場も様々ですが意欲に満ちているメンバーです。
- 本プロジェクトでは、そのうち14名のメンバーが運営・実践を行います。

(運営・実践メンバー内訳・4/15 現在)

現職教員(川崎市、横浜市、横須賀市、茅ヶ崎市)；5名(うち1名は校長)

本学OB；3名(図書館司書、画廊経営)

院生；2名

学部生；3名

大学教員；1名(大泉)

- メンバーの一人は、過去の実践を振り返り、次のようにコメントしています。

前略・・・昨年の先輩方の活動として知った“アートツール制作”は、授業などのように教師や大人が指示したり、教えたりするのではなく、子供が自発的に装置と向き合い、遊びの中で気付きや発見を得ながら、その子なりの感じ方でアートを楽しんだり感じたりするというコンセプトがとても新鮮で、魅力を感じました。普段の生活の中で、子供たちの世界には面白いこと、魅力的な楽しいことがたくさんあって、私たち大人が気付かないところで子供たちは様々なことを感じたり、楽しんだりしている。そういう中に、美術や教育に通じるような、“感じること”の原点のようなものが、とても自然に隠れているのではないか……のような考えが、私の中にも生まれました。“小学校の図工の授業”を離れ、もっと視野を広げて子供の世界や子供の目線を考えてみると、アートや“感じること”は、子供たちとともに密接に関係しているように思えたのです。・・・後略

(学部3年生(当時))

(3) これまでの開催実績

(2010年)

- ① 2月27日(土)
 - ・28日(日) イベント『第6回 ワークショップ・コレクション』にて
- ② 6月10日(木) 神奈川県茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校にて
- ③ 6月10日(木) 神奈川県立近代美術館葉山にて
- ④ 7月28日(水) 神奈川県茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校教職員実技研修会にて
- ⑤ 8月14日(土) 横浜市民ギャラリーあざみ野にて
- ⑥ 11月 6日(日) 横浜国立大学附属鎌倉小学校学校開放『鎌倉なんとかナーレ』にて
- ⑦ 12月12日(日) 『TRESSA Yokohama』(ショッピングモール)にて
- ⑧ 12月13日(月) 神奈川県横浜市立駒岡小学校にて

(2011年)

- ⑨ 2月26日(土)
 - ・27日(日) イベント『第7回 ワークショップ・コレクション』にて

2 実施案

(1) ワークショップ名

アートツール・キャラバン ~ あそんで つくろう。~

(2) 対象

- ① 避難所の幼児・小中学生とその保護者
- ② 避難所の子どもたちの編入学先の子どもたち



図3 『なんのたまご?』をつくろう!

(3) 実践運営メンバー

横浜国立大学 AEゼミメンバー (当日は 14 名予定)

(4) 実践内容 (例)

〈あそぶゾーン〉	会場に設置された〈アートツール〉で遊びます。 ↓↑ ··· 自由
〈つくるゾーン〉	〈アートツール〉に関連した造形活動に取り組みます。 ↓↑ ··· 10分間程度 (『なんのたまご?』製作 (図3))
〈つくりだすゾーン〉	絵の具などを使って、参加者でつくりだす活動に取り組みます。 ··· 自由 (『絵の具による活動』(図4))

上の〈つくるゾーン〉のプログラムには、一度に 20 名

程度が参加することができます。

さらに、以上 3 つのプログラムを何回か繰り返し実践することも可能です。



(5) 備考

- ・材料費等は、すべて研究費から捻出いたします。
(参加者から費用はいただきません)

図4 参加者でつくりだす活動

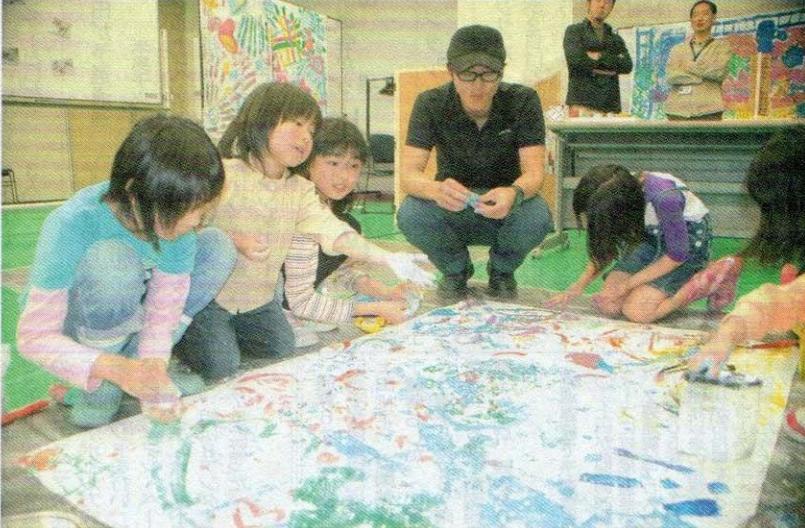
(6) 連絡先

- ・詳しくご説明にうかがいますので、下記にご一報ください。
- ・今後の連絡先は、以下の通りです。

横浜国立大学 大泉義一研究室
〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
045-339-3453 (研究室)
oizumi@ynu.ac.jp
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/>

2011年（平成23年）4月24日 日曜日 地域 (18)

絵の具などを使い自由に絵を描く子どもたち=川崎市中原区のとどろきアリーナ



■よこはま・かわさき

横浜国大 中原区の避難所慰問

学生ら

アートな遊びで笑顔

美術教育などを学ぶ横浜国大の学生らでつく
るゼミナール「アートツール・キャラバン」が23日、
被災者約100人が身を寄せる川崎市中原区のとど
ろきアリーナにある避難所を訪問。オリジナルのお
もちゃや遊ぶワークショップ「あそんでつくろう！ア
ートなあそびば」を開催し、避難所や地域の子ど
もたちが参加した。

アートツール・キャラバ
ンは「自分の感じているこ
とを大切にしてほしい」と、
五感を刺激する独自のおも
ちゃを使ったワークショップ
を各地で展開している。

今回は、東日本大震災発
生後に「自分たちででき
ることは何か」と考え続けた
学生や卒業生が中心となり、
計画した。ゼミナール
を取りまとめる大泉義一准
教授は「子どもたちは不安
を抱えながらも、徐々に新
しい友だちと仲良くなりつ
つあると思う。自由に遊ん
でもいい」と語る。会場では、
学生や卒業生が中心となり、
計画した。ゼミナール
を取りまとめる大泉義一准
教授は「子どもたちは不安
を抱えながらも、徐々に新
しい友だちと仲良くなりつ
つあると思う。自由に遊ん
でもいい」と語る。

（松島 佳子）

ユニーブなおもちゃが多数
並べられた。

風船の中に小麦粉や豆な
ど好きな物を入れて作る置
物「何のたまご？」に興味
を示した中原小学校5年生
小田さくらさん（10）は「た
まごを握ると、感触が持
ちいい。自分で作るので達
成感もある」と笑顔。絵の
具に粉を混ぜて絵を描く女
児の姿もあり、子どもたち
は思い思いに芸術を楽しん
でいた。

